

岐阜工業高等専門学校年次報告

第 2 号

目 次

研 究 報 告

英語資格・検定試験に対する学生の意識と高等教育機関における学習環境との関係をめぐる考察

—東海地区工業高専を比較して— 小 泉 嘉 輝 1

教員研究活動の概要 8

英語資格・検定試験に対する学生の意識と高等教育機関における 学習環境との関係をめぐる考察

—東海地区工業高専を比較して—

小泉 嘉輝*

Students' Attitudes Toward English Proficiency Tests and Learning Environments: A Study of Tokai Region NIT (KOSEN) Colleges

KOIZUMI Yoshiki

Synopsis

This study explores the attitudes of first-year students at KOSEN colleges in Tokai region toward English proficiency tests, particularly the TOEIC Listening & Reading Test, and their preferred English skills. Based on three years of survey data, many students are motivated to take the TOEIC for career-related purposes. At the same time, most students prioritize improving their speaking and listening skills for communication. However, current college curricula often fail to address these needs, especially in the early years. This study reveals a disconnect between student motivation and institutional support, calling for more responsive and skill-based English education in KOSEN college settings.

1. 前稿について

学びという営みは、多かれ少なかれ何らかの動機づけに支えられている。動機づけの中でも多くの学習者が依拠しているのは、所属する学校の各種テストや試験、志望する学校/企業の入学/入社試験、あるいは国や民間団体が主催する資格・検定試験等であり、これらが先に控えていることで学ぶ意欲の刺激と維持がなされている。特に最後の資格・検定試験は「外部」試験とも呼ばれているように、受験内容と結果に一定の客観性が担保されていることから、その存在は学習者の学びを促す大きな力となっている。

筆者は高等専門学校で英語教育に従事しており、この外部試験が指導する学生の英語学習意欲と深い関わりがあると考え、前稿を著した。この小泉(2024)では、勤務する岐阜高専の2023年度1・2年生を対象としたアンケートの結果を分析することにより、学生が外部試験について何をどれだけ知っているかという「認識」と、これから何をどういった理由で受験しようと考えているかという「意識」について考察した。ここで明らかになったことのひとつは、学生が在学中に受験しようと考えている外部試験のうち最

も人気があるのはTOEIC Listening & Readingテスト(以下、TOEIC)であり、その理由としては進学や就職といった学生がキャリア形成をする機会に、獲得したスコアを「活用する」という意識が働いているということだった。

2. 本稿の問い

筆者は2024年度と翌25年度にも、同じ内容のアンケートを、今度は新入生を対象を限定して実施した¹⁾。この直近2回分の結果に、23年度におこなったアンケートから1年生の回答を抽出し再集計した結果を加えることで、ここ3年にわたる彼らの外部試験への意識を確認することができる考えた。次の表は、過去3年間の新入生がこれから受験したいと考えている外部試験と、そのうちTOEICに注目した回答について簡単に整理したものである。

*一般科目

表1 1年生が在学中に受験したい資格・検定試験

試験名	2023年度 (n=113)	2024年度 (n=121)	2025年度 (n=195)
ケンブリッジ英検	2	1	1
実用英語技能検定	58	63	88
GTEC	0	0	0
IELTS	3	0	3
TEAP	0	0	0
TOEFL	11	5	26
TOEIC	87	63	145
どれも受験するつもりはない	16	33	29

表2 TOEIC受験希望者の割合

実施年度	受験希望者数(人)	全回答者数(人)	希望者の割合(%)
2023年度	87	113	77.0
2024年度	63	122	51.6
2025年度	145	195	74.4

この結果からわかることは、過去3年どの年度においても、実用英語技能検定（以下、英検）とTOEICの2つの試験が、学生が受験を希望する中心的な存在であるということである。特にTOEICに対する人気が顕著であり、各年度の新入生の半数以上——23年度と25年度に限って言えば7割以上——がその受験を前向きに考えているようである。たしかに、24年度のTOEIC受験希望者の数は英検と同じであり、アンケート回答者の半数を超えているとはいえ、ほかの2年度と比べると少ない。ただしこの年度については、TOEFLやIELTSを希望する学生の数についても、対象者数がほど近い前年の半分に満たないという減少が見られる。また「どれも受験するつもりはない」と回答した学生数が、前年度の2倍以上となっている点も見逃してはいけな。推察するに、24年度は英検の受験を意識する学生が多かったという年度特有の事実に加えて、そもそも外部試験自体を意識する学生が少数であった年だとも考えてよいだろう。むしろ、それでもTOEICの受験を考える学生が半数以上いたという結果は、この試験がいかに学生を引きつけているかを示していると捉えることもできる。いずれにせよ、年度によって差こそあれ、過去3年間に入学した学生の多くが、在学中にTOEICの受験を想定しているという点に疑問の余地はない。本稿執筆にあたり筆者は、この傾向を岐阜高専はもとより、同様の学びを提供する近郊の工業高専1年生の資格・検定試験に対する基本姿勢であると仮定したい。

すると、高専の英語教育の現場にいる筆者には、2つの疑問が浮かび上がってくる。ひとつはこのようなTOEICに一定の偏りがある学生の受験意識に対して、高専という教育機関が提供する学習環境は適切に応えられているだろうか、という問いである。もちろん、外部試験はあくまで

「外部」であり、それに向けての学習は学校側が与えるものではなく学生が自主的におこなわなければならない、と考えることもできるだろう。しかしTOEICへの意識がこれほど大きなものとなっている以上、そのすべてを無視してしまうのは学校にとって損失となりうる。むしろ、そうした学生の意欲を活用した取り組みを部分的にでも提供したほうが、彼らの学習効果が高まり結果として高い英語力が養われる——このように考えるのが理にかなっているのではないだろうか。この問いはいわば、外発的な動機づけと学習環境との関係を考えるアプローチとなる。そしてふたつめは、そもそも学生が伸ばさせたいと思っている英語技能（おおまかにいってリーディング・ライティング・リスニング・スピーキングのいわゆる4技能）はどれであり、高専はその希望に沿った学習環境を提供できているのだろうか、という問いである。動機づけという点では、試験よりも技能そのものに依拠したほうが強固なものとなりやすい。こちらは内発的な意欲と学習環境との関係に迫るアプローチである。この問いは一見、外部試験からは逸脱したものに見えるかもしれないが、本稿末尾でその関連を示し次稿につなげてみたい。

それでは、これら2つの疑問に答えるために、本稿では次のような手順をとる。まず次章では、後者の問いに答えるための材料を得る。学生が伸ばしたいと思っている英語技能に関し、新入生を対象とした過去3年分のアンケートの回答から、各技能の順位をその理由とともに提示する。そして、それらを総合的に俯瞰してみることで、高専に入学した近年の学生がもつ技能的な英語ニーズについて考察をおこなう。ついでその次の章においては、前稿で明らかにした学生の外部試験意識と、本稿で明らかになるはずである学生の技能意識をふまえながら、高専が提供する学習環境がこの2つの意識に対応できているかどうかを検討する。ここでいう学習環境とは、各高専が本科学生に開講している授業科目を指している。また先述のように、岐阜高専でのアンケート結果からわかることは、近隣の工業高専でも同様であると仮定して、本稿では東海地区に属する工業高専4校（岐阜、鈴鹿、豊田、沼津）を調査対象とし、学生の2つの意識と学習環境との関係について探究してみたい。

3. 岐阜高専1年生の英語技能に対する意識

3.1. 調査方法

高専に入学して間もない1年生は、英語4技能のうちどの技能を最も伸ばしたいと考えているか。これを知るために、次のような形式のアンケートをMicrosoft Formsを用いて作成し、2023～25年度の3年間の集計をとった。学生には、英語4技能として「読む力（リーディング）」「書く力（ライティング）」「聞く力（リスニング）」「話す力（スピーキング）」を順に選択肢として挙げた上で、そのなか

ら「最も身に付けたい力」「2番目に身に付けたい力」「3番目に身に付けたい力」「4番目に身に付けたい力」についてそれぞれ選んでもらった。そして選択した各技能に関して、なぜその順位にしたのかという理由について、自由記述の形で追記するよう求めた。また上位2技能に関しては、それぞれを自由記述で簡単に定義してもらったようにした。これを訊ねたのは、学生たちが重視するそれらの技能を、彼らがどのような力であると考えているかを明確にしたかったからである。なお定義に関する問いは、技能を選択した直後、理由を記述する直前の項目に位置した。

3.2. 学生の英語技能に対する意識—「コミュニケーション」への偏り—

上記のアンケートに対する学生の回答を整理したものが次の表と図である。

表3 最も伸ばしたい技能の回答数

技能	2023年度 (n=113)	2024年度 (n=121)	2025年度 (n=195)
リーディング	7	11	11
ライティング	4	5	15
リスニング	35	38	58
スピーキング	67	67	111

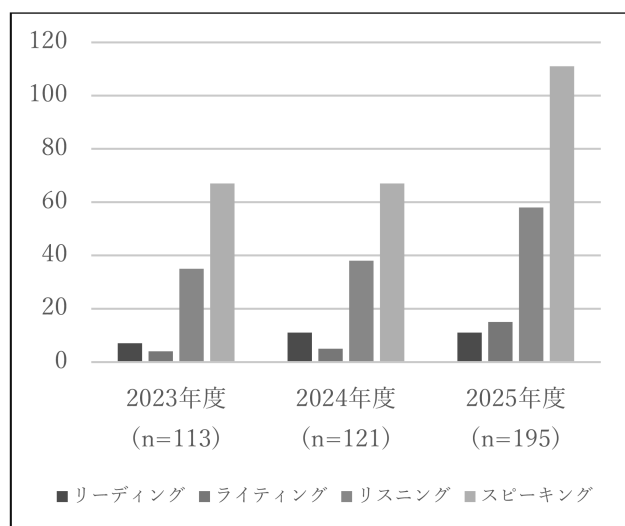


図1 最も伸ばしたい技能の回答数

まず注目すべきことは、図1からわかるように、過去3回すべての回答において、学生が重視する技能の順位の1位がスピーキング、2位がリスニングというように、上位2技能の結果がまったく同じであったということである。両技能が全体の回答数に占める割合は、23年度が90.3%、24年度が86.8%、25年度が86.7%と、3回を通じておよそ9

割近くの学生がスピーキングとリスニング能力の伸長を望んでいるということがわかった。また、上位2技能のあいだにも歴然とした差があったことも見過ごせない。どの年度であっても、スピーキング能力を伸ばしたいと考える学生数は、リスニング能力を第一とする学生の2倍に迫っている。一方で、ごく少数の学生に支持されていた下位2技能であるが、リーディングを重視する学生数は23年度と24年度には3位、25年度はライティングが優勢となり4位という結果となった。以上の結果から、1位スピーキングと2位リスニングに関しては、今後もその順位は不動であるだろう、ということが推察される。また下位となったリーディングとライティング能力については、今後も順位の入れ替わりがあるか、もしくはライティングがより重視される方向に変わっていくことが示唆されている。

次に上位2技能について詳しく見ていきたい。まず1年生が最も伸ばしたいと考えているスピーキングであるが、この技能についての定義を問う項目に多かったのは、「外国人」もしくは「外国人」「他国人」を相手に「コミュニケーション」「意思疎通」「交流」「会話」などをする能力、というものだった。一例を挙げれば「外国人と英語でコミュニケーションを取る力」のような回答である。そしてスピーキングを第1位とする理由については、およそ4つの項目に分類することができた。回答の中で多かった分類から順に挙げると、「社会的必要性」「技能的中心性」「苦手意識」「願望・憧れ」となる。社会的必要性とは、現代の国際社会を生きる上で、スピーキング能力が仕事とプライベートを問わず重要であるという考えである。国内外で外国人と仕事をしたり、国外で観光客として現地の人と、あるいは国内で外国人観光客と接したりする際に、英語を話すことになる想定している。たとえば「将来的に外国の人と関わる機会が増える中で外国の人と対話するために一番必要な能力だと思ったから」といった回答は、仕事と余暇にかかわらずスピーキングの必要性を主張するものである。技能的中心性とは、学生のスピーキング能力に対する信頼を表明するもので、「読めても、書けても、聞いても、最終的には話せないと社会では役に立たないから」「スピーキングができれば、他も身につく」「話すことができないと、意思疎通ができないから」などの理由がこれに該当する。苦手意識とは、他技能と比較した際にスピーキングが最も不得意であるという学生の意見である。回答例としては「自分はペーパーテストは中学生の頃からよくできていたがスピーキングで言いたいことが上手く表現出来ないことが多いから」や「英語が読めても書けても聞けても、話すことだけは全くの別物だと、自分の経験上、考えているから」などがあつた。願望・憧れとはその名の通りで、英語を話せることが「カッコいいとおもった」や英語を話せることができれば「楽しくなると思うから」といったような理由である。

第2位となったリスニングについては、スピーキングに関しての回答結果と重複するものが散見された。たとえばリスニング能力の定義としては、スピーキングよりその数は少ないものの、「外国人」と「意思疎通」や「コミュニケーション」をおこなうことだと考える回答が多かった。またリスニングを2番目に選んだ理由としても、スピーキングで挙げられた「苦手意識」と「願望・憧れ」に分類できる意見が多数を占めた。ただし理由に関しては、スピーキングとは異なる部分もあり、ひとつは「メディアの受容」がこれに当たる。メディアの受容とは、スピーキングでは直接的な会話へ意識が向いていたのに対し、リスニングでは会話以外のラジオ・映画・動画等の音源を聴きとれるようになりたいといった学生の思いを反映した考えである。例としては「字幕無しで洋画が観たいから」や「リスニングができれば、YouTubeなどインターネットの世界が広がるから」などが該当する。そして、リスニングに関して最も特徴的であった理由は「スピーキングとの相互補完性」を指摘するものであった。これは英語でのコミュニケーションがスピーキングとリスニング能力から成り立つという考えに由来し回答には、スピーキングができたとしてもリスニングの力が低いと意思疎通が成立しない、というような認識が述べられていた。学生の声では「自分の考えを話せても相手の気持ちや考えがわからなければ会話が成立しないと思う」や「会話を円滑に進めるのに必要だから」などがその代表である。このような技能の捉え方は学生一般に共通しているようで、最も伸ばしたい能力としてスピーキングを挙げた学生のほとんどが、2番手としてリスニングを選択している。また最初にリスニングを選んだ学生も次点としてスピーキングを伸ばしたいと回答している。以上、上位2つの技能に関する結果を見てみると、英語技能に対する学生の一般的なニーズがわかる。それは、彼らがスピーキングとリスニングという2つの音声技能を統合して、国内外の外国人と意思疎通するための「コミュニケーション」能力として考えており、現代の国際社会を生きていく上でこの力を伸ばしたいと願っているという事実である。

下位となった2つの技能についても詳しく考えてみたい。まず2回の年度で3番手となったリーディングに関する回答を見ると、一部の学生はこの技能を伸ばしたい理由として、書籍・ウェブサイト・メールやチャットといった総合的な文字媒体を英語で読めるようになるためだと記している。一方で、媒体の種類を明確に分類できる回答も見られ、「海外の論文等から沢山のことを学べるから」といった学術的な動機、「仕事で英語の資料を理解する力は必要だと思うから」といったビジネスを意図したもの、標識・看板・掲示板・メニュー・広告といった主に国外での生活を想定した情報、そして「読書が好きなので、外国の本を原作のまま読んでみたい」といった娯楽や趣味と考えられ

るものなどが挙げられていた。また、下位技能であるためだろうが、理由には上位技能と比較した上でのネガティブな意見が散見され、「読む力は最悪翻訳機能を使えばなんとかなるから」のような記述が少なくなかった。この種の意見は、特にライティングを選択した際の理由の大多数を占めていた。まれに「テストで使う」のような肯定的だと捉えられる理由があったものの、そのほとんどは「英語を書くよりも、実際に聞いたり、話したりする機会のほうが多いと思う」のように書くことの相対的な頻度の少なさを指摘したり、「4つの中では、後回していいと思った。英語は、コミュニケーションが出来て使えるものだと思った」のように上位技能を優先する考えであったり、「他の3つさえできれば自然と書けるようになると思うから」のように他技能の力の転化を信じる意見など、書くことを消極的に捉えるような意見であった。以上、下位2つの技能に関する結果を見てみると、学生の技能意識は直接的な「コミュニケーション」のための音声技能の獲得に大きく傾いているがゆえに、文字技能を伸長する意欲がその影に隠れてしまっていることがわかる。文字技能向上の根幹を成していた学術的な学びとしての英語は、もはや彼らの内在的な動機づけとはなりえないのかもしれない。

4. 外部試験および技能に対する学生の意識と高専における学習環境との関係

4.1. 調査方法

前章までで明らかになったのは、高専の新入生が、外部試験としてはTOEICの受験を希望し、技能としてはスピーキングを第一とした音声技能を伸ばしたいと考えている、という二種類の動機づけの正体である。本章ではこの2つの動機づけと、高専が提供する学習環境との関係を確認していきたい。2章でもふれたように、ここで筆者のいう高専とは、東海地区にある岐阜・鈴鹿・豊田・沼津の各工業高専を指している。また学習環境とは、これら4校が本科学生に提供する授業科目を意味する。授業に関しては主に、各高専が公表している2025年度のウェブシラバス上に記載された「教科書/教材」と「到達目標」、そして「教育方法等」中にある「概要」欄に注目し、その科目の特徴を捉えていきたい。ただし岐阜高専に関しては、現場で働く者として詳しくわかるところがあるので、折にふれてそのような情報を付け加えることとする。

4.2. 各高専の英語関連科目の調査

各高専本科の授業科目を俯瞰してみると、同じ工業高専とはいえ、その特徴は実にさまざまであることがわかる。まず、岐阜高専の英語科目の特色は、理工系英語とビジネス英語の指導に力を入れている点である。1・2年生では、一般的な高等学校と同じような英文法の学習をおこなっていくが（1年生英語Bと2年生英語C）、同時に英語Aにお

いて「理数系の基礎的な知識や概念を英語で表現できるようにするための高等専門学校に最適なテキスト」(成美堂「理工系学生のための基礎英語Ⅰ」²⁾)を用いて、科学的な基礎知識について英語で学習する。またこれだけではなく、2年生後期から3年生前期にかけては、外国人非常勤講師による技術英語科目³⁾(2年生英語B・3年生英語C)を受講する⁴⁾。さらに3年生では通年で、先の理工系英語テキストの続編(亀山ほか, 2019年)でその学びを発展させている(英語A)。ところでこの科目では、別のテキストとして『新TOEIC TEST 出る順で学ぶボキャブラリー900』(神崎, 2009年)が指定されている。これは3年生時からTOEIC受験を意識した取り組みが始まっているからである。続く4年生ではそれが本格化し、唯一の英語科目でTOEIC対策に特化した授業が実施されている(英語A)。4年生ではこのような授業でTOEIC対策をしながら、年に2度のTOEIC IPテストを校内で受験することが必須となっている。5年生では大学にあるような教養を目的とした英語科目が準備されているもの(英語A)、TOEICで600点以上を取得できていればこの科目の履修が免除されるという学内規定がある。このようなことから、岐阜高専がTOEICを重視している姿勢が読み取れる。スピーキングについては、先にも取り上げた外国人教員による技術英語科目の目標のひとつが「英語のスピーキングとリスニングの技能を向上させること」(岐阜高専シラバス「2年生英語B」)と設定されている。2年生後期から3年生前期にかけてのみ、一定の英語で話す機会が担保されていると言えるだろう⁵⁾。

鈴鹿高専の第一の特色は、岐阜高専と比較して、理工系英語への配分がごく短期間に抑えられている点である。理工系の英語科目としては、3年生前期においてのみ開講され、そこでは岐阜高専が1・2年生で使用する理工系英語テキストを用いた授業がおこなわれている。代わりに1年生では、岐阜高専でも開講されているような文法の授業(英語ⅠA)に加え、普通高校の英語コミュニケーションの授業で使用されるテキストを使った科目が用意されており(英語ⅠB)、これは2年生にも引き継がれている(英語ⅡB)。そして第二の特色としては、スピーキング能力の養成を主眼とした科目が多数開講されているという点である。2年生前期には、専任外国人教員による科目で「英語スピーチのアウトラインを構成する力を向上させ、スピーキングの練習を提供すること」(鈴鹿高専シラバス, 英語ⅡA)を目的とした授業が用意されている。さらに3年生後期には外国人ティーチング・アシスタントに補佐されたコミュニケーション関係の授業があり(英語特講)、4年生前期には先述の外国人教員による発展的なスピーキング⁶⁾を学べる選択科目が開講され(コミュニケーション英語Ⅰ)、同様の授業は5年生の前期・後期にも受講することができる(実践英語ⅡB, 実践英語ⅡC)。一方でTOEICに関連

する科目は、岐阜高専と同様に4年生に開講されているのみである。

豊田高専の特色は、学生のコミュニケーション能力を低学年から伸ばしようというカリキュラムを設計している点である。1年生から「英語会話」という科目が開講され、そこでは授業時間の半分を使って非常勤「外国人講師による少人数グループ(15名程度)での英会話」(豊田高専シラバス「英語会話A」)が実施されている。また2年生では「高校生のための英語スピーキングトレーニングブック」(アルク「ヒビスピ 高校生の「日々」を表現するスピーキング練習帳」)である『ヒビスピ』(中田, 2014年)を教材として設定した科目が用意されている(英語表現A, 英語表現B)。また、1年生から3年間を高校のコミュニケーション英語で使われる検定教科書を使用した授業(1年生: 英語コミュニケーションⅠA, 英語コミュニケーションⅠB, 2年生: 英語購読ⅡA, 英語購読ⅡB, 3年生: 英語購読ⅢA, 英語購読ⅢB)が展開されていることから、豊田高専のコミュニケーション英語に対する強い意識を窺い知ることができる。一方で、理工系に類する科目にも比較的多くの時間が割り当てられており、3～4年生にかけて、岐阜や豊田とは異なるテキストを用いた授業が準備されている(3年: 科学英語基礎ⅠA, 科学英語基礎ⅠB, 4年: 科学英語基礎ⅡA, 科学英語基礎ⅡB)。TOEIC科目については4年生に準備されているが、岐阜や鈴鹿とは異なり前期のみの選択科目とされ、期間は短く受講は学生に委ねられている。

沼津高専の特色は、通常の高校のカリキュラムを拡大したような形で、「総合英語」の涵養を目指しているという点である。1～3年生にかけて週4時間の「総合英語」(1年: AI・BI, 2年: AII・BII, 3年: AIII・BIII)が開講される。1～2年生ではコミュニケーション英語関連、3年生では総合問題集や文法問題集⁷⁾を使った演習中心の科目である。さらに4年生時も週2時間と時間数は減るものの、総合英語AIVが通年で開講され、ここでは大学生向けのテキストを用いて、英語各技能をバランスよく伸ばすことをねらいとしている。TOEIC関連の科目はなく、理工系英語については4～5年生にかけて半期単位で「工業英語」, 「技術英語」または「科学英語」のいずれか(学科により科目名が異なる)が4高専で唯一、一般科目ではなく専門科目として全学科に開講されている。スピーキングに特化した科目としては、5年生で外国人教員による通年の「選択外国語(英会話)」を選ぶことができる。

4.3. 学生の意識と学習環境との関係—主体性への依存—

前項では、各高専の開講科目について概観した。次の2つの表は、詳細に確認した上記の内容を、学生が強く意識しているTOEICとスピーキングに関連した科目に焦点を当て整理したものである。

表4 各高専のTOEICに関連した開講科目

学年	岐阜		鈴鹿		豊田		沼津	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
1		×		×		×		×
2		×		×		×		×
3		△ 指定テキストに TOEICの単語集		×		×		×
4		○		○	○ 選択	×		×
5		×		×		×		×

表5 各高専のスピーキングに特化した開講科目

学年	岐阜		鈴鹿		豊田		沼津	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
1		×		×	○	○		×
2	×	△ 外国人教員に よる技術英語	○	×	△ 指定テキスト にスピー キング教材	△ 指定テキスト にスピー キング教材		×
3	△ 外国人教員に よる技術英語	×	×	△ 外国人TA		×		×
4		×	○ 選択	×		×		×
5		×	○ 選択	○ 選択		×		○ 選択

表4からわかることは、TOEIC受験に対して意欲的な1年生がいる状況でありながらも、各高専は授業科目としてはその動機づけに早期対応できていないという事実である。岐阜・鈴鹿・豊田の3高専はTOEIC科目を開講しているものの、新入生はその受講を4年生になるまで待たねばならない。もちろん低学年においては、ビジネス英語よりも基礎的な能力を涵養することが先決であることに疑問の余地はない。しかしそれを認めた上でも、3年という長期にわたり学生のニーズに応えられていないという現状については、今後いささかの議論の余地があるのではないだろうか。

表5からわかることは、スピーキング能力を養成する学習環境が、各高専によって大きく異なるという事実である。スピーキングに特化していると考えられる科目は鈴鹿・豊田・沼津の3高専で開講されているが、履修する時期においても、またその科目数においても、高専によってばらつきがある。豊田高専を除いては、1年生時にスピーキング科目を受講することはできない。在学中に十分な量のスピーキング環境を整備しているのは、鈴鹿高専のみだと言っていいたろう。そしてこの鈴鹿の事例からわかるように、充実したスピーキング科目を提供できるかどうかは、各高専に専任の外国人教員が所属しているかどうかによって大きく変わってくるようである。英語を話せるようになりたいという意欲が高専学生一般にあるのならば、各高専

間で彼らを支援する環境に大きな差があるのは、決して好ましい状況とは言いがたい。こちらの動機づけに対しても、高専全般が応えられているとは言えず、各校にはさらなる努力が必要なのかもしれない。要するに学生は、彼らがもつ大きなモチベーションを、基本的には自主的な学習に向けなければならないというのが現状なのである。TOEIC受験への意欲にしても、スピーキング技能伸長への意欲にしても、それを生かすか殺すかはおよそ学生の手委ねられている、という身も蓋もない事実がこの長い論考の着地点である。

5. 次稿にむけて

ここまで本稿では、高専1年生の2つの英語学習に関する意識と学習環境との関係について論じてきた。2つの学習意識とは、TOEICを受験したいという外に向けられた動機づけと、スピーキング能力を向上させたいという内側にある動機づけである。これらに対して、学校側が提供している授業科目はまだ十分に応答できているとは言えず、学生はその意欲を自主的な学習に向けなければならない。これを高専の課題とするかどうかは、各校の(英語)教員の考え方に左右されるだろう。本稿がその検討をするきっかけとなれば幸いである。筆者個人としては、たとえごく一部であっても、低学年のうちに学生のニーズに応える科目を設けるべきだと考えている。

ところで、学生の2つの学習意識については、別に考えるべきことがある。学生が受験を望むTOEICは“Listening & Reading” Testである一方で、彼らが最もできるようになりたいのは英語を「話^sす^pこ^eと^a」である。2つの意識は一致しておらず、モチベーションのあいだには奇妙なねじれが生じている。これは一体どういうことなのだろう。そしてどのようにすればこのねじれは解消されるのだろうか。前稿、そして本稿にかけて追求してきた資格・検定試験と学生の意識について——次稿ではこの疑問を端緒として新たな論考を始めてみたい。

注

- 1) 2024年度の対象学科は電子制御工学科、環境都市工学科、建築学科の3学科であり、25年度の対象学科は機械工学科、電気情報工学科、電子制御工学科、環境都市工学科、建築学科の全学科である。
- 2) 亀山・青山・武田(2017年)がこのテキストである。
- 3) 指定テキストが*Technical English 1* (Bonamy, 2022) であるのでこのように称する。
- 4) 3年生後期に電気情報工学科の学生は学科専任のインド人教員による「技術英語」を必修科目として受講するが、他学科の学生には開講されていないため、ここでは取り上げていない。
- 5) たしかに、このようにシラバスに明示されていなくとも、授業内でスピーキング活動をおこなっている例は数多くあるだろう。特にコミュニケーション英語関連の授業では、検定教科書にス

:小泉

スピーキング活動が推奨されている。実際、筆者は2023-24年度の1・2年生の英語Aにおいて、授業冒頭の活動として実施していた。しかし本稿での調査にあたっては、各高専の授業の実態まで把握するのは困難であるので、シラバスに書かれた内容から判断したい。

- 6) TOEFLのライティングトピックを題材としたスピーキング活動をおこなっている(鈴鹿高専シラバス「コミュニケーション英語I」)。
- 7) 1年生の英語W Iと2年生のW IIですでに事前に文法学習を済ませている(沼津高専「1年生英語W I」「2年生英語W II」)。

参考文献

- Bonamy, David. *Technical English 1*. Pearson, 2022.
- アルク「ヒビスピ 高校生の「日々」を表現するスピーキング練習帳」
<https://book.alc.co.jp/book/b10029587.html>
- 亀山太一・青山晶子・武田淳監修『理工系学生のための基礎英語 I : Fundamental Science in English I』成美堂, 2017年.
- 亀山太一・青山晶子・武田淳監修『理工系学生のための基礎英語 II : Fundamental Science in English II』成美堂, 2019年.
- 神崎正哉『新TOEIC TEST 出る順で学ぶ ポキャブラリー990』講談社, 2009年.
- 岐阜高専シラバス「2年生英語B」https://syllabus.kosen-k.go.jp/Pages/PublicSyllabus?school_id=21&department_id=02&subject_id=0019&year=2024&lang=ja
- 小泉嘉輝「英語資格・検定試験に対する学生の認識および意識に関する考察 —岐阜高専1・2年生の場合—」『岐阜工業高等専門学校紀要』59号, pp.16-20, 2024年.
- 鈴鹿高専シラバス「2年生英語II A」https://syllabus.kosen-k.go.jp/Pages/PublicSyllabus?school_id=25&department_id=11&subject_id=0028&year=2024&lang=ja
- 鈴鹿高専シラバス「4年生コミュニケーション英語I」https://syllabus.kosen-k.go.jp/Pages/PublicSyllabus?school_id=25&department_id=11&subject_id=0073&year=2022&lang=ja
- 成美堂「理工系学生のための基礎英語 I」<https://www.seibido.co.jp/np/code/9784791960378/>
- 豊田高専シラバス「英語会話A」https://syllabus.kosen-k.go.jp/Pages/PublicSyllabus?school_id=23&department_id=11&subject_code=01131&year=2025&lang=ja
- 中田達也『ヒビスピ 高校生の「日々」を表現するスピーキング練習帳』アルク, 2014年.
- 沼津高専シラバス「1年生英語 I」https://syllabus.kosen-k.go.jp/Pages/PublicSyllabus?school_id=22&department_id=12&subject_code=2025-118&year=2025&lang=ja
- 沼津高専シラバス「1年生英語 II」https://syllabus.kosen-k.go.jp/Pages/PublicSyllabus?school_id=22&department_id=12&subject_code=2025-099&year=2024&lang=ja